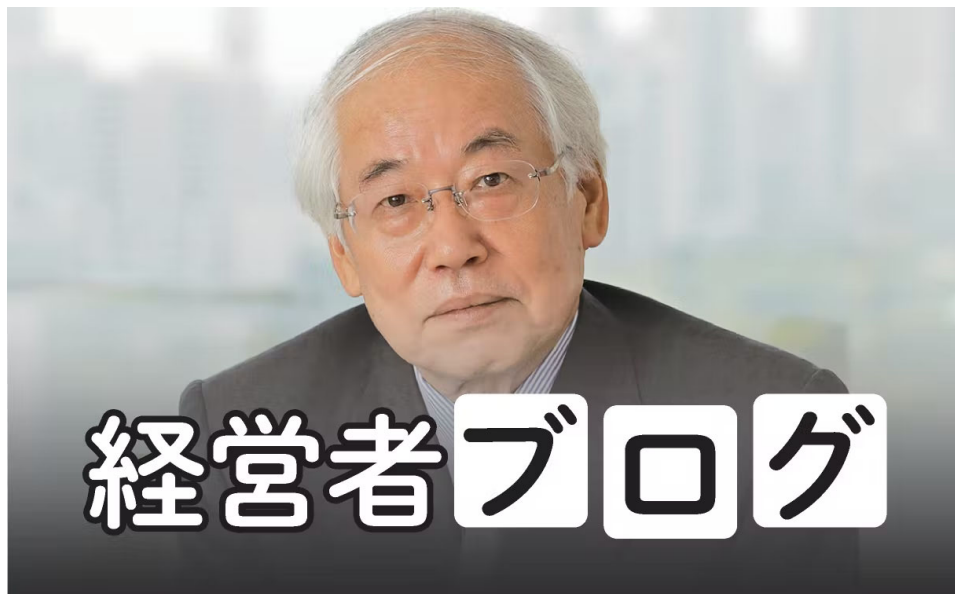


休まず書き続けて13年目、今回は最終回

経営者ブログ 鈴木幸一 IIJ会長

2022/6/8 2:00 | 日本経済新聞 電子版



祖父母に劣れるわれらの父母は/さらに墮落せるわれらを産みたり/われらもさらに無能なる子孫を産むらん（ホラティウス「頌歌（しょうか）」第三の六）

オルテガ・イ・ガセットの「大衆の反逆」（岩波文庫）からの孫引きだが、古代ローマの詩人、ホラティウスの頌歌が現実のものとなるローマは、紀元150年以降のことである。ガセットはこう書いている。「紀元150年以降、こうした生の萎縮感、つまり減少、衰退、脈拍低下などの印象が次第に強まっていった」

ホラティウスは古代ローマにあって、後に訪れる衰退期を予測していたのかもしれない。ガセットによれば、ローマ帝国全体を見渡しても、百人隊長につけるような勇敢なイタリア人を見つけることもできなくなり、子供も生まなくなった。そしてイタリアの人口は減少した。

「物質的な豊かさ」追求した時代

東京という大都市が大空襲によって見渡す限り焼け野原となり、広島や長崎には原爆が落とされ、瞬時に都市の形が消滅したほどの敗戦国となった日本。その敗戦国で戦後、間もなく生を受けた私の時代は経済復興から高度経済成長、なによりも「所得倍増計画」という政策に象徴される「物質的な豊かさ」を追求した時代だった。





ハルジオン（筆者撮影）

「豊かさを追求する」という国民のコンセンサスがあって、世界から「奇跡の復興」と評された経済大国になった過程こそ、私が生きてきた時代である。その間、日本から世界的な大企業が生まれた。今やその地位は米国のGAFAや中国企業に、すっかりとって代わられてしまっている。

出生率の低下、人口の減少が深刻な課題となって長い。戦争で多くの人命を失った国などで一般的に、出生率が高まる傾向がみられるようだが、日本にも当てはまる。小中学校のクラス数は1学年4クラス程度が普通だと思うが、私の学校は8クラスもあった。それも1クラスの生徒数をかなり増員させた上での話である。兄弟の数が4人、5人という家族がまれだったという記憶もない。家の空間もぎゅうぎゅうの状態が当たり前だった。

衰退の道への漠然とした不安

出生率の低下、人口の減少は日本だけの問題ではない。タイや韓国をはじめ、アジア諸国でも同じように深刻な状況となっている。生活スタイルの変化などが進み、この傾向が変わることはない。

ローマ帝国の衰退と出生率との連関とは、言うまでもなく、同じ原因ではない。ただし、ローマにおいて、百人隊長につける人材が居なくなるといった状況が現出したとすれば、極めて深刻な事態だったに違いない。



ヒメウツギ（筆者撮影）

経済成長、物質的な豊かさの追求といったテーマが消えることはないはずだ。だが、神話ともなったこの2つのテーマだけでは、将来の展望が見えないとなった時、ほかのテーマが浮かばず、なんとなく衰退の道が続けるのではないかという漠然とした不安がある。それが現在の日本の状況なのかもしれない。

戦後の日本は世界でもまれな「平和憲法」の下、国民的な合意があって、戦いの存在を消去したうえで「平和」を論じていた。ロシアのウクライナへの侵攻、拡張主義を続ける中国の存在など、世界の情勢が危機的となるに伴って、今後、国民的な合意が揺らぎ、大きく別な方向に旋回していく可能性を否定できない。歴史に学ぶまでもなく、状況というのは変化が始まると極端に動きがちである。

スターは飛びぬけて足の速い子

小・中学校の運動会から、50メートル徒競走に始まり、順位をつける競技を避けようとする動きを漏れきくたびに、子供の頃の苦い経験を思いおこす。昔は小学校の運動会は、地域の一大イベントだった気がする。家族が運動会の会場である校庭を囲み、子供たちの競争を眺め、子供たちと昼食を一緒にする。スターはなによりも飛びぬけて足の速い子だった。運動が苦手な子もいて、それはそんなものだとか親も当の子供も納得をしていたのである。



ロサキネンシス（筆者撮影）

私はまあまあ運動が好きだったのだが、飛びぬけて速く走れるわけでもなかった。私の通った小学校では、最後の種目がメインイベントとなる地区別リレーだった。1年生から6年生までそれぞれの地区でいちばん速く走れる子が6人選ばれて、リレー競走をするのである。私の地区は比較的、人数は少なく、私も選ばれることがあった。6年生の時もそうだったのだが、メンバーを見ると私より速い同級生が3人はいたのだ。

「幸ちゃんがもうちょっと頑張れば」

リレーが始まる時、私の思いは、私にバトンを渡すときは、その3人よりは後ろでつないでほしいということだった。私の謙虚なそんな思いを忘れたのか、私の地区の下級生は予想もしないほどの走りをして、トップで私にバトンをつなぐことになった。最後の1周、トップでバトンを渡された私はそもそも、運が悪かったのである。

父母や生徒が大歓声で見守る中、案の定、私は2人に抜かれて3位だった。他の3人の同級生は日ごろから私より速いのである。「幸ちゃんがもうちょっと頑張ればねえ」。同じ地域にすむ父母から、そんな声が聞こえてくる。その時の記憶は本当に懐かしく、たまに思い起こすことがある。「子供を競争させて、敗者となることに余計な気を遣うほど愚かな教育はない」と思うのだが、日本はそこまで迷い込んでしまったらしい。



アジサイ（筆者撮影）

いちども休まず

私がこのコラムを始めたのは、日本経済新聞が電子版を始めた2010年からである。というわけで、私は13年目まで書き続けたのである。今さらそんな言葉もなくなってしまったようだが、『皆勤賞』なのである。内容はともかく、13年目になるまでいちども休まず書き続けたわけで、皆勤した努力については多少のお祝いをしていただいてもいいかと思うのだが、「へえーっ」と驚かれるだけである。

13年目になるまで続いた習慣で、週末、間違っ文章を書こうと机に向かってしまう気がするのだが、公になることはない。長年、ありがとうございました。

鈴木氏の経営者ブログは今回で終了します。ご愛読ありがとうございました。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.